

中日関係の変遷を社会現象から観察する

林美茂

(中国人民大学哲学院教授・愛知大学 ICCS 訪問教授)

はじめに

私は愛知大学の卒業生で、今回のシンポジウムに呼んでいただいたことを光栄に思い、心から感謝を申し上げる。

2021年1月21日に日本国際フォーラム「米中覇権競争時代の日本の針路：コロナが変えた世界」という新春のシンポジウムがオンラインで行われた。日本はこれからポストコロナ時代を見据え、刻々と変化する世界情勢をどう読み込むかについて議論が交わされた。

(参加者：神谷万丈(防衛大学校教授)、渡邊啓貴(帝京大学教授)、加茂具樹(慶應義塾大学教授)、袴田茂樹(青山学院大学名誉教授)、伊藤剛(明治大学教授)、寺田貴(同志社大学教授)、河合正弘(東京大学名誉教授)、詫摩佳代(東京都立大学教授)、村野将(ハドソン研究所研究員等))

今回のこのシンポジウムは、これに呼応するものだと思う。私は国際関係に関して門外漢であるため、自分の身近で起きたいろいろな出来事を中心に、中日関係の変化についての所感を述べたい。

中日関係というのは、変わるものと変わらないものがある。李春利先生が紹介された、エズラ・ヴォーゲル先生のご講演タイトルにもなっている「永遠の隣人」ということは、私がここでいう「永遠に変わらないもの」に当たる。しかし、両国間の関係は、近代以前は良い隣人というような関係がずっと続いて

いたが、近代以降はライバルのような関係に変わり、時代とともに発展してきた。

中日関係に関して、いくつかの面で考察する必要があると考えている。第一に、中日両国における二国間の関係。第二に、東アジアにおける中日の多国間関係。第三に、世界的規模での中日の多国間関係である。これらの関係は政治、経済、文化、外交等の領域を含む。私は国際関係の研究者ではないため、これらの問題に対しては専門家のご意見を拝聴したい。このシンポジウムに参加して私にできることは、二十数年間中日間を往来し、自分で見た社会的現象を根拠に、私が注目する両国関係の変化の要因を語ることだけである。以下に、私が感じたことを三点と、ひとつの回顧と展望を述べたい。

第一、蔑視から直視へ

—中国を見る日本社会の眼差しの変化—

日本は誰もが認めるように、アジアで最も早く資本主義先進国に連なった国家で、明治以降、日本人が自負するところでもある。一方中国は、半植民地半封建の時代から新民主主義の社会主義国家が建設され、長い時間をかけて列強の支配から脱却し、国家民族の危急を救い、統一された新中国を作りあげた。新中国は成立したが、国際的地位としてはまだ発展途上国であった。社会主義国家が建設されてから約30年後、やっと改革開放や市場経済の導入等にしがたが、中国社会は約40

年で急速な発展を遂げたが、多くの方面で未だに日本に遅れをとるところがあり、これも中国人としてずっと自覚してきた問題である。しかし近年、こうした認識に変化が現れている。日本にせよ中国にせよ、以前と違ったことが起こってきているのだ。例えば、私が以前日本のテレビよく見ていたのは、中国人が日本を模倣しているという報道である。番組のメインにせよゲストにせよ、みな軽蔑した口調で中国人の知財意識の低さや知財権の侵犯について話していた。日本人が中国を見下ろす発言に、私も中国人として恥ずかしく思ったことであった。しかし、ここ数年の中国社会の進歩と発展にしたがって、状況はまさに変わりつつある。昨年、日本のあるテレビ番組で中国の発明をとりあげられ、「今は世界が中国をコピーする時代だ」という指摘があり、とても喜ばしく感じた。番組ではその場のゲストが、現在どれだけの生活用品が中国産なのか考えたところ、その答えは、家電も含め95%ぐらいが中国産であった。結論としては、今日の日本人の生活必需品は中国なしでは考えられない。また現在中国で流行っている「電子マネー決済」や「シェア自転車」などは、世界中の国でどんどん採用されている。こうしたところで、日本社会が中国を見る眼差しが、蔑視から直視へと根本的に変わらざるを得なかった。こうした変化が、今後の中日関係にどのような影響を与えるかは、深く探っていくべき問題であろう。

第二、密入国の厳格な警戒から正規入国の歓迎へ

一中国人の入国に対する日本人の態度の変化一

日本での十数年の生活で目にした、もっともマイナスなニュースは中国人の密入国の報道であった。私は福建出身であるが、福建は

当時、日本に密入国して仕事をするのが最も盛んだった場所である。福建からの就学生や留学生が日本のビザを取得するのは、中国の他の地域の申請者よりもかなり難しかった。私はかつて日本の友人の妻から、「あなたは海を泳いで渡ってきたのではないですか？」と聞かれたことがある。それはただの冗談であったが、私にとっては非常に突き刺さるようなものがあり、「そうです、伊良湖から上陸しました」と冗談で答えるよりほかなかった。これは、当時日本社会が来日中国人を見下ろす態度をとってもよく表した言葉である。当時中国はまだ非常に貧しく、特に南方の一部の省では、歴史的に華僑が海を渡るという伝統があり、国を出て暮らしを立てるといのは極めて普通の選択肢であった。日本で働いてお金を稼げると聞き、沢山の人が家財を投げ打って留学費用を工面した。もしビザが得られなければ、「蛇頭」を通して危険を冒しても日本へ渡り、お金を稼ごうとしたのである。こうした人々はただ自己の廉価な労働力を売ろうとしただけであり、客観的にみれば、当時の日本にとって労働力不足の解決に多大な貢献をしたといえる。しかし、日本人からすれば、彼らはただの密航者であり、存在価値を認められず、社会心理から政府の施策に至るまで、密入国に対して厳しく取り締まるということになったのである。これは実際には悪循環であり、ビザ発給を渋れば、それだけ密航者が増える。或いはビザを得るのが難しいために、「蛇頭」が台頭して多くの密航事件が発生し、さらには密航船においてたまたま密航者が死亡する悲劇が起きてしまった。しかし、中国経済の発展に伴って、中国人はもはや命の危険を冒してまで密航する必要はなくなった。これによって、日本政府も中国人留学生へのビザを発給しやすくなり、旅行ビザまで出すようになった。厳格な防止から歓迎へと方向転換することで、両国の民

間交流も、制御することから比較的自由な往来へと変化していった。ご存知のように、ここ数年大量の中国人観光客（ここでは以前日本に密航した人も少なくない。彼らは帰国後に事業に成功し、子供を日本に留学させたり、親類に勧めて日本を旅行させたりしている）が来日し、日本の旅行業界や消費市場の繁栄に大きな貢献をしている。以前の密航者は日本社会に廉価な労働力を提供し、その彼らが現在は高い消費をもたらしている。日本が規制をゆるめたことで、彼らはもう非合法なルートで入国しなくてよくなった。しかしこうした人達は、世の中から無視された存在であったようだ。こうした人々が数十年の中日関係の発展にどのような影響を与えてきたのかについても、研究の価値がある。中日関係の研究においては、政府レベルでの交流や、民間人の合法的な往来以外に、上記のようなかつては非合法であった入国者についても研究する価値があると思われる。

第三、民族感情の対立から文化同源の再認識へ

中日間では歴史上ずっと密接な文化交流と、お互いを参考にし、影響しあう関係を保ってきた。漢学が日本に入り日本の文字が誕生、中国に倣った大化の改新、遣隋使・遣唐使の派遣、禅僧の入宋、宋僧の来日、近代中国留学生は日本近代の西学を中国へ持ち帰るなど、日中両国には長い間友好の往来の歴史がある。しかし、近代に日本が中国への侵略戦争を起こしたことから、中国人には大きな災難が降りかかり、それによって日本人への恨みの感情が生まれ、今に至ってもそれは完全には消えていない。中国人は本来大らかで寛容な民族であるが、中国文化の恩恵を受けて自身の文化を確立してきた日本が、近代から却って中国の遅れを蔑視し始め、さらには侵略戦争

を起こし、特に戦後日本の一部の政治家が戦争の罪を隠そうとしていることで、中国人の日本に対する敵視を大きなものにしてしまっている。

中国にいる私の友人の妻が日本への旅行から帰国したとき、日本社会の文明、秩序、社会の安定、日本人の親しみ深さ、素養のよさなどを大いに賞賛し、以前まで持っていた日本への敵対的な感情を改め、日本文化は中国伝統儒家思想が提唱する精神を受け継いでおり、我々が学ぶべき事が沢山あると考えるようになったと言った。そばで黙って聞いていた夫は、突然厳しい問いを發した。「お前が天国に行ったとき、相手が突然刃物を振り上げてきても、まだ天国が素晴らしい場所だと思えるのか？」彼女はその場で言葉を失った。これは比較的典型的な例であるが、こうした人は中国国内において少なくない。中国の民衆の中で、日本の侵略が残した傷痕が癒えることはないことを、彼が代弁しているのだ。当時彼は私に、「今まで日本人が戦争犯罪に対して本当の反省と謝罪の誠意を持っているのを見たことがないからだ」と言った。

新型コロナウイルスが発生し、日本社会は中国武漢で起こった疫病の災難を我がことのように受けとめ、自発的に義援金や救援物資を募る活動が起きた。武漢に対する物心両面での支えや、さらには政治家達までこうした救援活動をしたことで、中国社会は突然日本人の温かみに触れ、日本人に対する態度に大きな変化が生じた。先ほど出てきた私の友人も、ある日突然私に電話をくれ、今回の日本人の友好の表現に感動したことを伝えてきた。彼が言うには、今回の日本人の心からの誠意、自国と中国の文化の源が同じであるという自覚、それこそが見るべき日本人であった。我々はみな漢字文化圏の中でともに歩む東アジア民族であり、文化同源で、肌の色も同じ黄色、こうして各々の境遇を自分のこととして受け

取るものなのだ、と。そして、その夜、彼は「山川異域 風月同天」の一句を書き、齋石として書齋に掲げたとのことだ。もし日本人がみなこのように中国文化との同源性に頷くのであれば、二度と手前勝手なことは起こらず、米国と手を組んで中国を抑え込もうということもないであろう。そうすれば、私はポストコロナの時代における中日関係はきっと良好な方向へと大きな変化がおきることを確信する。

第四、回顧と展望

—青山一道同雲雨，明月何曾是兩鄉—

ここ五十年の中日関係を見渡すと、いつも重大な国際事件の影響を受けているようだ。72年に中日間の数十年に及ぶ対立が終わり、歩み寄り始めたが、それは米中国交の大事件の影響が大きい。78年の『日中平和友好条約』への署名は、72年に「先に交わりを復し、後に条約を締結する」という方針が確定されていたが、これも中国共産党第11回中央委員会第三次全体会議において改革開放の政策決定をしたことに後押しされているであろう。78年から89年にかけて、中日関係は全体的に温まり素晴らしい発展時期となった。またこの時期に、たくさんの中国人の自費留学生在が日本へ渡った。1989年にベルリンの壁が崩れ、東西冷戦が終結した。もともと両陣営に分かれていた中日両国の関係は新たな歴史的段階に入った。この時、海部首相や平成天皇が訪中し、同時に鄧小平の「南巡講話」以降の中国は改革開放が加速し、中国の巨大市場の拡大によって、日本の中国経済発展に対する信用も大きくなった。95年の「村山談話」によって、中国人は日本の歴史反省の新たな展開を目撃した。この後の江沢民主席の訪日により、良好な環境が創出された。90年代全体は、78年以降の両国の友好関係が安定し、さらに

発展させていった時期であったといえよう。この時期の中日両国の関係が、「世界における中日関係」や「アジア太平洋地域における中日関係」といった新たな視野での関係へと拡張されたのもこの時期でもある。しかし、21世紀に入って、小泉内閣で右翼勢力が台頭し、靖国神社の参拝や教科書改訂の問題が出てきたことにより、中日関係は「経済は熱く、政治は冷え込む」という局面に陥った。特に第一次第二次安倍内閣の期間は、米国が再びアジア太平洋戦略を調整するのに呼応し、何十年もの日中関係の発展が凍りつくこととなった。この時期さらに野田内閣が発足し、釣魚島購入に関する騒ぎの中で、中日国交正常化40周年の盛大な記念事業はニュースの一項目となるに過ぎなかった。21世紀に入り、中日両国の協力で「中日友好21世紀委員会」が成立したが、新しい世紀において中日関係の発展に関して実質的で新しい成果は何も生まれていない。

第三次安倍内閣後期に新たな転機が現れた。安倍首相訪中を契機として、中日間の緊張した外交関係は再びおだやかなものとなり、2019年に実施される予定であった習近平主席の訪日への布石が打たれることとなった。しかし、突如現れた新型コロナウイルスの蔓延により、この訪問計画は延期となり、未だ行われていない。地球規模での疫病の蔓延により、世界の人々は「人民第一、生命第一」の中国政府の治国理念が簡単なスローガンでなかったことがわかった。また中国と米国の疫病に対する異なった態度と施策によって、日本政府と日本の民衆は、中国の政治制度の国家や社会統治への有効性や優越性を認識することとなった。特にトランプ政権の一連の覇権的行為で、日本政府と民衆は、狼と共に舞う危険性を知った。加えて、近日発生した米連邦議会の議事堂襲撃事件では、米国人の世界各国に対する二面性が一目瞭然となった。ま

た、この事件が発生した後、従来「自由と民主」を標榜し、それを口実として世界各国の内政干渉を行ってきたアメリカにおいて、「大統領」の言論の自由が完全に剥奪されるという事態が発生したことは、非常に興味深い事態であると言えよう。

日本政府は今後の安全保障を考えるためにも、中国との友好関係を如何に位置づけるのか改めて慎重に検討するべきではないだろうか。新型コロナウイルス終息後の中日関係は、必ず好転するものと期待する。言い換えれば、日本政府が今後如何にして自国の本当の発展を実現するかを考えるにしても、改めて中国との友好関係を深く見つめ、思考することが必要になってくる。先に言ったエズラ・ヴォーゲル先生が提起した「永遠の隣人」という中日間「永遠に変らないもの」を意識しながら、前向きな姿勢で「文化同源」を忘れずに「隣人」関係を築いて行く理念を互に確認しつつともに歩み、そうなれば、ポストコロナ時代の中日関係は、きっと期待でき、斬新で素晴らしい発展ができるであろう。